



# 文部省史料館所藏生活用具の研究(二)

中 村 俊 亀 智

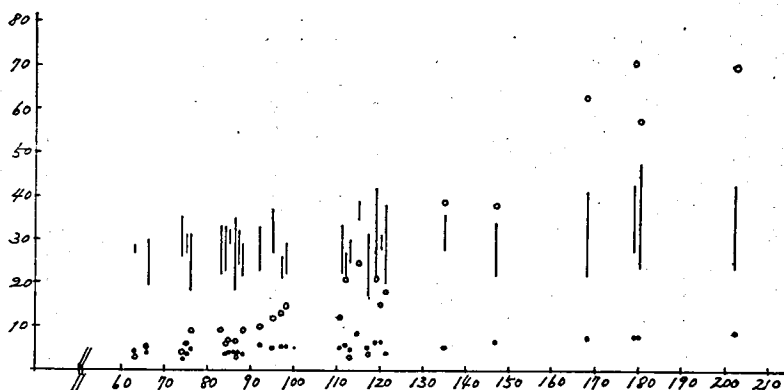
一、シヨイバシゴ(東京都保谷町).....	二五頁
二、カルイ(鹿児島県竹島).....	三三
三、シロカキゲタ(長野県南穂高町).....	三五
四、オーアシ(千葉県光町).....	三六
五、ハナカンジキ(新潟県種彦原村).....	三六頁
六、カシキゲタ(鹿児島県樋脇村).....	三九
七、沖箱(所在地不詳).....	三四
八、ヤンギョオ(山梨県原七郷).....	三九

## 一、シヨイバシゴ(背負梯子)

東京都北多摩郡保谷町下保谷にて、昭和三二年二月五日、古河静江氏採集。高橋孫右衛門氏寄贈。収集番号二二三二八。寸法は上程二三・五センチ、下程四七・五センチ、高さ一八〇・〇センチ。重さは六・一キロ。

背負梯子には、形態的機能的にみて、およそ三つの型が考えられる。第一はいわば大型の背負梯子とも呼ぶべきもので、丈が極めて高く、本来、刈取った稲束や麦束を運ぶのに用いられたと考えられる。第二は中型の背負梯子で、薪炭の搬出から町への買物にいたるまで、広く利用されていた。第三は、その形が極めて小さく、横木(棧)はわずか二本で、専ら山間地帯で用いられていたという。

第1図 背負梯子の形態と大きさ



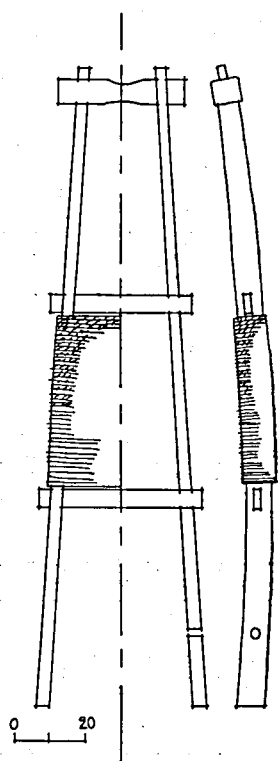
横軸に背負梯子の長さ、縦軸にそれぞれ上程・下程・アシの長さ・柱の幅の値をとってみる。黒丸の柱の幅は梯子の長さが長くなってもこの図ではそれほど変わらないが、白丸のアシの長さの値は130センチの辺りからぐんと大きくなっていく。実線は上程と下程の値を結んだもので、120センチの辺りから大きくなるのがわかる。

こゝにあげる東京保谷の背負梯子は以上の第一の型に属し、しかも、その典型とみなすことができる。そこで、以下この標本について、大型の背負梯子の形態上の特徴をいくつか挙げて記してみようと思う。

まず、そのプロポーションであるが、下程対高さの比は一對三・七五、下程対上程の比は約一・二〇に当り、梯子の枠組自体、細長い、上下の差の著るしい梯形をなすことが確かめられる。特に注目されるのは所謂下の棧以下の部分（アシ）の長さの割合で、全長の約三分の一を占める。このような長いアシは大型の背負梯子族の著るしい特徴をなすものと考えられる。因みに、所蔵の資料について、所用地の明らかなもの五六例中、その半数を抜出し、高さの順序に配列してみると、下程と上程との開きは一二〇辺りを界として、またアシの値は一一〇辺りを界として、急速にその値を増すことに気づく。

次に細部については、特に柱の形が特徴的である。柱は根元で幅七五ミリ、厚さ三五ミリ、頭部で幅六〇ミリ、厚さ三五ミリで、第一表の如く、下程に対する比率は必ずし

第2図 東京保谷のショイバシゴ



ムギ束を運ぶ背負梯子。立てたまま休めるよう長いアシがあり、また、頭には太い笠木がはまっている。柱は向って左側、すなわち荷物をつけるほうに曲がっている。アシの下のほうには荷縄と負い縄とを通す小さな穴がある。柱も棧もホゾによって接合されている。材料の太さ、長さともほどよく釣り合いを保ち、全体として重厚である。

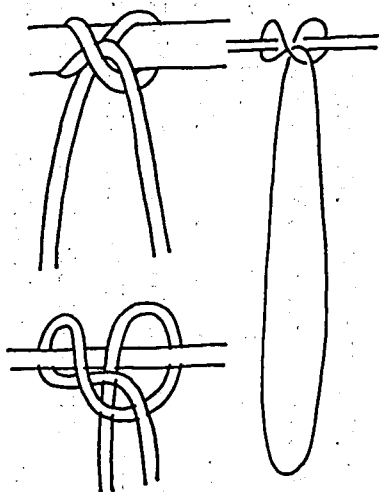
も高くはないが、その断面は細長い矩形をなし、一般の梯子の柱の円形半円形あるいは方形の断面とはきわだった対照を示す。しかも、柱は外側に緩やかに弯曲し、柱の形成する弧と絃との隔たりは中の棧の上で約三〇ミリ、下の棧の所で約四〇ミリの値を示す。この種の弓形の柱は、都会風の直線的な背負梯子の柱や、所謂有爪型の背負梯子の柱の形とは著るしく趣きを異にするもののように思われる。

柱の頭部には笠木をおくための幅三〇ミリ、厚さ二〇ミリ、長さ六〇ミリの柄<sup>は</sup>が作出されている。また、下部二〇センチの所には、荷縄と負い縄とを通す小さな穴が穿たれている。笠木は縦横六〇ミリ、その中央部は荷縄の縄ずれによって、あたかも堅杵のようにくびれている。この外、背負梯子には頭に笠木をおかず、上もまた中や下の棧と同様に棧を用いて固定する、いわば上棧型式が広く行われている。この大型の背負梯子の場合、上を棧の型式とせず、笠木を用いたのは、梯子の上と下との釣り合いや上部での用材の耐久性を考慮したためであろうか。所蔵の資料によれば、梯子の上部、就中、棧を柱にはめる柄や柄の手前の部分、あるいは、柱の柄穴の辺りにはネジレなどの力が働く

第一表 背負物のプロポーション

寸法など 収集番号	呼 称	所 用 地	高 さ cm	重 さ kg	下 程 cm	下 程 に 対 す る 比				
						上 程	高 さ	柱 幅	機 幅	アジの長さ
22329*	シヨイバシコ	東京、北多摩、保谷	180.0	6.1	47.5	0.49	3.79	0.16	0.11	1.20
Z36*	シヨイタ	埼玉、児玉、金屋	202.0	7.1	43.0	0.55	4.70	0.22	0.08	1.63
8495*	?	茨城、久慈、太子	179.0	4.1	43.0	0.65	4.16	0.17	0.14	1.65
8490*	?	新潟、南魚沼、石打	168.5	4.4	41.0	0.55	4.11	0.17	0.12	1.55
21327*	ヤセウ	新潟、中蒲原、横越	147.0	4.7	34.0	0.65	4.32	0.19	0.15	1.12
5195*	?	秋田、仙北	135.5	3.3	36.0	0.78	3.76	0.11	0.11	1.08
8391*	?	長野、長野	120.0	2.6	38.5	0.52	3.12	0.10	0.09	0.47
6153	シヨイバシコ	千葉、安房、西師	120.0	3.4	31.3	0.92	3.83	0.21	0.11	0.48
4101	カ ル イ	鹿児島、大島、十島	120.0	3.4	41.5	0.47	2.89	0.18	0.08	0.49
8668*	ヤセウ	山形	117.0	2.0	31.0	0.55	3.77	0.16	0.11	0.13
8887	?	千葉、君津、木更津	115.3	3.6	39.0	0.90	2.96	0.23	0.10	0.64
22314	シヨイコ	茨城、日立、助川	112.5	1.9	30.0	0.82	3.72	0.13	0.10	0.10
8492	?	山形、米沢	111.0	2.1	27.3	0.81	4.07	0.22	0.12	0.81
22324	シヨイバシコ	埼玉、飯能、坂石	111.0	1.6	33.5	0.64	3.31	0.16	0.12	0.36
7242	オ イ コ	山口、大島、西方	98.0	2.5	29.0	0.74	3.38	0.16	0.14	0.52
8498*	?	(山梨県内地方)	97.0	1.6	26.3	0.82	3.69	0.21	0.23	0.51
7987	オ イ コ	岡山、邑久、牛窓	95.0	4.0	38.0	0.70	2.50	0.13	0.13	0.32
16325	シヨイタ	千葉	92.0	2.3	32.7	0.70	2.81	0.18	0.08	0.31
6386	シヨイコ	富山、中新川、上市	87.0	2.0	35.0	0.51	2.49	0.11	0.14	0.17
8395	シヨイコ	山梨	87.0	1.5	31.5	0.78	2.76	0.13	0.11	0.10
2381	ヤセウ	福島、会津若松	87.5	0.9	29.5	0.73	2.97	0.13	0.10	0.31

第3図 ショイバシゴの負い縄



負い縄はそれぞれ中の棧に結び、下の小さな穴に通す。図はその結び方を示す。負い縄はこのように一本の縄であって、それをループ状にまわしたものである。それが実際背負うときには肩のあたりで左右くっついて二本一筋のようになる。

らしく、棧が折れ、また柱に亀裂が生じている例がすくなくから見受けられる。

なお、この梯子には太さ一〇ミリの藁縄を用いて荷縄と背負い縄とがとりつけられている。一見したところ、この太さの縄ではこの梯子の大きさに比べ、いささか心もとないようにも思われる。しかし、負い縄の場合、それを補うかのように、その掛け方には工夫がなされている。すなわち、第3図の如く、負い縄はそれぞれ、中の棧と柱の下の小さな穴とを利用してル

\*は笠木型を示す。中型や小型では上上の差はこの標本のようにならない、柱頭と横頭とは大型も中型も大差はない、両者の比とアソの長さとの比は次第に減少してゆくことがわかる。なお、笠木型は大型の梯子に多いように思われる。

22855	?	長野、諏訪	85.0	1.6	32.7	0.90	2.60	0.12	0.11	0.23
Z 43	?	長野、諏訪	84.0	1.8	32.5	0.69	2.58	0.12	0.12	0.17
2451	シ	愛知、北設楽、本郷	83.0	2.3	33.0	0.67	2.52	0.09	0.08	0.27
22332	ハ	東京、八王子、恩方	75.5	1.4	31.0	0.59	2.44	0.16	0.08	0.29
5806	シ	静岡、安倍、美和	74.0	1.6	31.0	0.87	2.39	0.15	0.10	0.19
23324	セ	岐阜、吉城、上室	73.5	2.0	35.0	0.76	2.10	0.10	0.09	0.11
22935	セ	長野、諏訪	65.5	1.2	35.0	0.64	2.15	0.15	0.16	0.16
5042	セ	石川、鳳至、南志見	63.0	1.4	28.0	0.98	2.25	0.16	0.16	0.11

「ブ」状に掛けられる。そして、その中央の所、あたかも肩のかゝる辺りでは、一筋の縄が二本取りとなるように掛けられている。柱の小穴を利用してのこのような配線もまた（柱の幅が広く、したがって、柱に穴を自由に穿つことができるのだと考えれば）この種の大型の梯子の一つの特徴とみなすことができる。

採集記録によれば、この標本は、もとその持ち主が、特に大工に誂えて作らせたのだという。そういえば、全体の形にも厚みがあり、作りにも隅々までゆきとどいた仕上げのあとをみることができる。しかし、梯子の以上の形態は、明らかに、在来の、この地方に古くから行われていたと思われる梯子の型を借りたものと考えられる。所蔵の資料の中には、埼玉県児玉郡金屋村採集の「ショイ」イタがある。この背負梯子は上程二四・〇センチ、下程四三・〇センチ、高さ二〇二センチ、重さ七・一キロで、形・重さとも保谷の背負梯子よりはひとまわり大きい、その形は、同じように笠木型式で、断面矩形の柱を用い、負い縄・荷縄の掛け方などもほとんど一致しているといつてよい。この両者にやゝ近い例としては笠木型式で丸柱の大型の梯子や上機型式の大型背負梯子が考えられる。この種の梯子は関東地方には曾つて広く分布していたと考えられる。なお、関東地方以外の標本では、とりあえず、新潟県南魚沼郡石打村採集の一例と北方文化博物館旧蔵の同県蒲原郡横瀬村の「ヤセウマ」とをあげることができる。この二例は、丈がやや短かく、下程とアシとの比率もやや低く、そして全体の作りにも武蔵野の背負梯子とは自から異なる気風が感ぜられる。用途もまたやや異なるように思われる。

この標本については、その背景として所謂近世以降の南関東の雑穀生産を想起しておく必要がある<sup>(1)</sup>。この辺りでは、昔、刈取った麦は一尺二、三寸にまとめ、サシボー、または、ショイバシゴで畑から家のニワに運び、クルリボーやカナゴキでこなしたという。サシボーは一名ノメシボーといい、長さは一八〇センチ、太さは約五〇ミリ。両端に麦束二束ずつ刺して担ぐという。そしてサシボー三回で運ぶ量が背負梯子の一回分に当るが、背負梯子はゆっくり

歩かねばならないし、サシボーの方は競争でさっさと運んだので、結局、梯子もサシボーもその運搬の量はほとんど変らなかつたとのことである。ところがリヤカーが導入されるようになり、『武蔵保谷村郷土資料』が書かれた時代には、背負梯子はもはや「使はぬと見えて物置の軒下などに背中当の縄も巻かず負縄も附けずに置いて」<sup>(2)</sup>あり、次第に姿を消していった。

#### 註

(1) 高橋文太郎氏『武蔵保谷村郷土資料』（昭和十年アチックミューゼウム刊）所引の村誌には「土質ハ壤土ニシテ地

味肥エ農業盛ニシテ農産物ニ富ム。其中産額ノ最モ多キ

ハ大麦ニシテ小麦、大豆、粟、陸稻、米、蕎麦等之ニ次グ」とある（同書三頁）。

(2) 高橋氏同書四四頁。

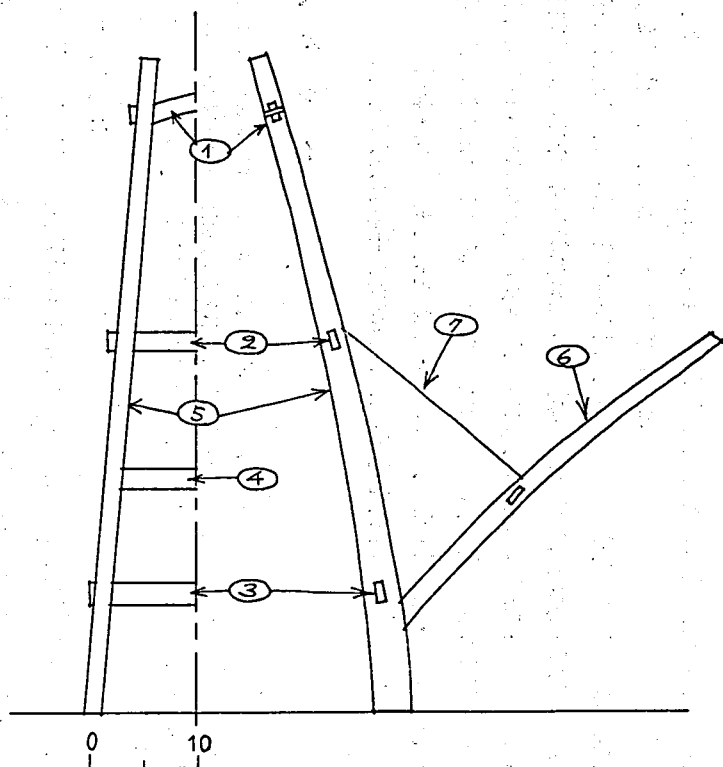
## 二、カルイ

鹿児島県大島郡十島村竹島にて、昭和九年五月一四日、AM同人採集。収集番号四一〇一。寸法は上程一九・五センチ、下程四一・五センチ、高さ二二〇・〇センチ。重さは三・四キロ。

背負梯子はまた従来しばしば言及されているように爪（荷物を支える腕木）の有無によって有爪型と無爪型との二つの型に分けることができる。有爪型は、さらに、爪の位置その他によって、爪が柱の中程の所にある有爪A型と、爪が柱の根元近くに位置する有爪B型とに細分されている。有爪型の分布範囲は、主として西南日本で、そのうち有爪A型は中国地方西方の地域から九州一円、B型は中国地方の東部より近畿地方にかけて広く行われていたことが、すでに戦前の調査によって明らかにされている<sup>(1)</sup>。

しかし、以上のうちとくに有爪A型については、その用途や製作等に依じて、さらに幾つかの恐らく地方的な型ともいうべきものに細分されるように思われる。こゝにあげる竹島のカルイもまた有爪A型のそのような一例に属する

第4図 竹島のカルイ



1は上の棧、2は中の棧、3は下の棧、4は間の棧、5は柱、6は荷物をつけるための腕木、7は腕木を支えるための縄を示す。これに背中当てや重い縄や荷縄をかける。柱は保谷のショイバシゴとは逆に反っている。試みに背中当てなどをつけたままで立ててみたところ、腕木とも釣合いを保ってひとりで立っている。そこで、その形によって立っているままの姿を図におこした。

ように思われる。そこにはカルイ型の背負梯子に独自の特徴ともいふべきものが見出される。

まず例によってプロポーシヨンからみてゆこう。下程対上程の比率は一對〇・五、下程対高さの比率は一對二・九で、枠組は全体としてかなり上ほすみの梯形をなしていることが確められる。このような形はカルイの第一の特徴と考えられる。

次に細部についてみると、柱は根元で七五ミリに三五ミリの断面矩形で、根元より約三〇センチの辺りまでは同じ幅で伸び、三〇センチを越える辺りから漸次細まり、しかも前記の保谷の背負梯子とは逆に、外側に向つて彎曲している。柱の頭部は縦横三〇ミリ、弧と絁との隔りは三〇ミリである。このような柱の形態は他の有爪A型にも共通する特徴と考えられる。しかし、この梯子では根元の部分が特に幅広いのが他の梯子と異なる点ではないかと思われる。この柱の根元の幅広さは爪の位置とも密接な関係があり、この広い部分に下の棧を嵌込むための穴とそして爪を取り付けるための穴とが交錯している。棧は上中下三本とも幅三五ミリ、厚さ一〇ミリの薄い板で、いずれも通し柄で柱に接合されている。このように薄い板を棧に用いる手法は有爪型の梯子に共通した手法であるように思われる。また中の棧と下の棧との間には同じ板を用いて包み柄でさらに一本の棧が挿入されている。これは背中当てを支えるための棧である。

爪は長さ七八・〇センチ、厚さ一五ミリ、幅二五ないし三五ミリ。先きの幅はやゝ細く、二本の爪の間隔は先で一四・五センチ、元で三六・〇センチ、先が十分狭まっていることがわかる。爪の中程の所には幅三五ミリ、厚さ一〇ミリの棧がいてあり、爪はこの棧と前記の中の棧との間に張り渡された太さ五ミリのロープによって支えられている。爪を納める柱の穴は幅二〇ミリ、長さ五〇ミリ、深さ三〇ミリで、かなりの余裕がある。すくなくともこの標本では、爪は脱着自在である。このような爪の構造はこの梯子の用途とも関係しているのであろう。なお、爪と柱とのな

す角度は約四〇度で有爪A型の標例の六〇度よりは若干緩やかなように思われる。また、爪の位置は柱の約四分の一の所にあり、標例の「柱の半分の位置」よりはやゝ下にある。これもまたこの梯子の用途と聯関しているものと思われる。

負い縄の編み方は三ツ組で、元は平組、先半分は丸組である。こうした負い縄の形は時として他の背負梯子にも見受けられる。しかし、その杵への取り付け方ははなはだ特徴的で、負い縄は負い縄とは別の紐(太さ五ミリの紐)で中の棧に結び付けられている。

背中当ては縦三八・〇センチ、横二二・〇センチ、厚さ二五ミリ、これもまた負い縄と同じように杵からは独立し、細い紐で中の棧に結ばれ、梯子から釣り上げられている。このように梯子の杵・負い縄・背中当て・爪の各部分が互に独立し、これらがひとつに組合されるという構成方法は、有爪A型の背負梯子の著るしい特色と考えられる。背中当ての編み方は、藁を太さ一五ミリほどに束ね、それを幅一五ミリの藁の帯で、二束二段ずつ絡らげたものである。この種の手法は所謂巻藁細工の手法であって、腰当てや鍋敷き・鍋蓋などにもみられ、この地方の工芸を特徴的とする手法の一つと考えられる。

この標本については用途その他の記録が明らかではないが、ほぼ同じ形の背負梯子を鹿児島県肝属郡大根古町ではカリコといい、「南九州の山地に広く分布して製炭と関係ふかい」という。<sup>(2)</sup>

註

(1) 磯貝勇氏「背負梯子」『日本の民具』昭和三年角川書

店刊) 一四九—一五五頁。

(2) 小野重朗氏「南九州民具図帖」(昭和四一年同氏刊) 六頁。

### 三、シロカキゲタ（代掻き下駄）

長野県南安曇郡南穂高村にて、昭和二八年、藤沢宗平氏採集、同氏寄贈。収集番号二一六六九。寸法は長さ五七・五センチ、最大幅二三・五センチ、高さ一〇・〇センチ。重さ二・一キロ。

所謂田下駄には、すでに指摘されているように、用途形態の相異なる二つの系列が含まれる。一つの系列はいわば稲刈り下駄で、湿田や深田の稲刈りや種播き作業に用い、従来の形態分類における輪櫓型、下駄型、ナンバ型、小型の杵型、小型の箱型を含む。これに対し、もう一つの系列は代掻き下駄で専ら田の代掻きに用いられ、大型の杵型、ないしは箱型の形態をなすことがすでに明らかにされている。なお、代掻き下駄（一名大足おおあし）の機能は「沼田に踏みこまぬためと云ふより、緑肥を入れて代踏みをした後に田の土を平らにしたり、ネバラせるのが目的」で、「人が代踏みした後、又は馬に代踏みさせた後を前についている縄を、右足のは右手に左足は左手に持って、一足一足踏んでいく、踏まぬところがないようにするのが大切である」という。<sup>(1)</sup>すなわち、代掻き下駄の場合には稲刈り下駄とは異なり、下駄を田の泥のなかに踏み込み、泥を攪拌し、均質化し、底を平らにするのが目的なのである。事実、代掻き下駄を田のなかに踏みいれると、田の底の重い土が下駄の杵や棧の間から迫り上り、表面の軽い泥と混り合うという。そういえばこの代掻き作業は私たちには相当に力のいる荒い作業のように思われる。そのような作業に耐えるため、田下駄にはどのような工夫がなされているのであろうか。特にこゝでは箱型の代掻き下駄についてこの点を検討してみようと思う。

第一に足をのせる足板は、幅約一一・〇センチ、厚さ一〇ミリの胴の長い八角形の板である。他の多くの箱型の田下駄のように、この標本もまた足板とそれを取りまく杵や棧にはいずれも同じ厚さの板が用いられる。足板は多く前

第二表 箱型の田下駄のプロポーシヨシ

内 容	呼 称	所 用 地	重 さ	幅	幅 に 対 す る 割 合					
					長 さ	高 さ	杵の幅	杵の厚さ	棧の幅	棧の厚さ
21669	シロカキゲタ	長野、南安曇、南穂高	2.10	23.5	24.5	0.42	0.38	0.03	0.38	0.03
13273	?	?	1.60	26.0	24.6	0.15	0.12	0.06	0.12	0.06
23755	カンジキ	千葉、市川、堀之内	1.10	27.5	16.9	0.18	0.09	0.06	0.07	0.05
2893	オーフシ	長野、上伊那、朝日	2.20	26.0	15.7	0.29	0.29	0.06	0.19	0.06
6773	?	長野	1.75	23.0	16.7	0.48	0.33	0.04	0.33	0.04

長野の箱型は杵木が幅の広い板で作られシロカキゲタである。他の二点は特型に近い。千葉のカンジキは幅切り下駄である。

後の棧に柄接ぎされるのが定石であるが、この標本の場合、棧が薄く、しかも、前の棧には手縄を通すための小さな穴があげられているので、柄は使えず、そのかわりに足板は棧へ釘で打ちつける。緒の位置は足板のほぼ中央で、直径一〇ミリの小穴を穿ち、そこに太さ一五ミリの藁の緒をすえる。

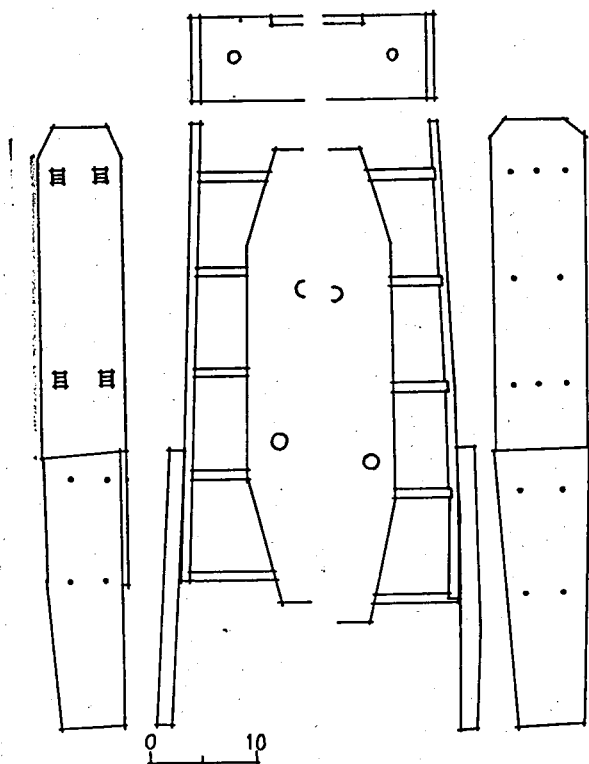
棧は前後とも合せて五枚。寸法を計ってみると、一番前の棧は長さ二一・二センチ、一番後の棧の長さは二四・二センチで、三〇ミリほどの開きがあり、平面の形はわずかながら末広がりとなっている。棧を両側の杵木に嵌込むためには、杵木の内側に幅一〇ミリのちょうど棧が嵌るような溝を切り、そこに棧をいれるのであるが、前と後と中の三枚の棧の場合には縦横一〇ミリの小さな二枚柄（ただし柄の頭に楔をいれるシゴクホソ）で接ぎ、残り二枚は柄なしで溝にはめ釘を打つとめる。しかも、この二枚の棧の場合、なかなか手がこんでいて、そこだけは杵木の溝を断面梯形の蟻型の溝の形に切っている。

両側の梓木の形は軽快で、頭の両端を落し、まるく削り、一方、尾は鳥の尾のように漸次その幅を細めている。この標本が採集されたとき、すでに尾の先きは折れ、その部分に幅六八ミリ、長さ二五センチ、厚さ一五ミリの割り板が当ててある。尾の出は一三・五センチで、これは全長の約四分の一に当る。このように平面が末広がりで、しかも後に尾を長くひく田下駄の形は岐阜県大野郡のオーアシ（一名タナラシゲタ）や静岡県採集のオーアシにもその例をみることが出来る。恐らく、この形は田下駄の前進みの歩行方法と関係し、力の均衡をはかるために思いつかれた形であらうか。

ところが、以上は片方だけの話で、この田下駄のもう片方はや、作りを異にしている。もう片方のほうは、大分補修したらしく、梓木や棧の一部が新しいのと替えられ、そして、棧と棧との間を前よりも広くとり、梓と棧との接ぎ方を一層簡単にした様子がうかがえる（棧の間隔を広げたのは、古い足板を生かして使おうとして、もとの釘穴を逃げようとしたためにそうなったのであらう）。特に梓と棧との接合には、梓木に溝をほり、柄を一切使わず、棧を嵌込み、外から釘でとめている。

所蔵の資料にはこのほかなお二つの箱型田下駄が含まれている。一つは村上俊順氏が長野県から採集されたものといい、呼称はやはりオーアシで、長さ三八・五センチ、幅二三・〇センチ、高さは一一・〇センチ、重さは一・七五キロで、やはり厚さ一〇ミリの薄い板で形作られている。その板の接ぎ方には、縦横一〇ミリ、長さ一五ミリの二枚柄、あるいは、三枚組みつぎの手法が用いられている。棧同志も格子に組合され、そこには一層指物的な味いを感じられる。ただ、縦二四・五センチ、横一一センチの足板だけは無雑作に釘で打ちつけられている。なお、この標本もまた使い込まれているためか板が所々欠けている。もう一足は上伊那郡朝日村平田のオーアシで、曾つて中村寅一氏の報告とともに『民具問答集』に紹介されたものである。この方は長さ四〇・七センチ、幅二六・〇センチ、高さ

第5図 信州南安曇のシロカキゲタ



この田下駄は箱型で、枠も棧も足板もうすい板で作られている。枠の後には添え木のアシが補強されている。左片方は後に作りかえたらしく、右片方とは寸法も作りも異なり、ホソを使わず釘打ちしてある。その様子を対比させてみるため、両方半分ずつをかいて、二つを合せてみた。一番前の棧には縄を通す小さな穴がある。

七五ミリで形はやや小さく、棧の数もわずか三本ではあるが、棧・梓とも厚い板を使い、そのため重さはかえって二・二キロと若干重くなっている。棧は梓木に厚い一枚の通し柄で接ぎ、足板もまた前後の棧に丈夫な柄で接がれている。そこには前の二足の田下駄ともまた違った一つの行きかたがなされているように思われる。

このようにみると、以上三足の田下駄には同じ箱型とはいい条、それぞれ三足三様の作りがなされていることがわかる。恐らくこれ以外にもなお数種の作りが行われていたであろう。中村氏も前記のオーアシの報告のなかで「浅田に使用するのは板が薄くて深く、沼田に使用するのは厚くて浅く出来ている。横の板は、三枚が普通であるが、中箕輪村附近にては四枚として、両側の板をもっと長くしたものもある」と指摘されている。<sup>(2)</sup> 薄い板を用いた箱型の田下駄は厚い板の梓型の田下駄より、軽く、踏みやすいいのではなからうか。そのかわり、薄い板を使えばそれだけ毀れやすくなる。そこで、自から板の組み方や接ぎ方が改良されたのではなからうか。

註

よる。

(1) アチックミュージゼアム編『民具問答集』(アチックミュージゼアム刊昭和十二年)二〇二頁。中村寅一氏の報告に

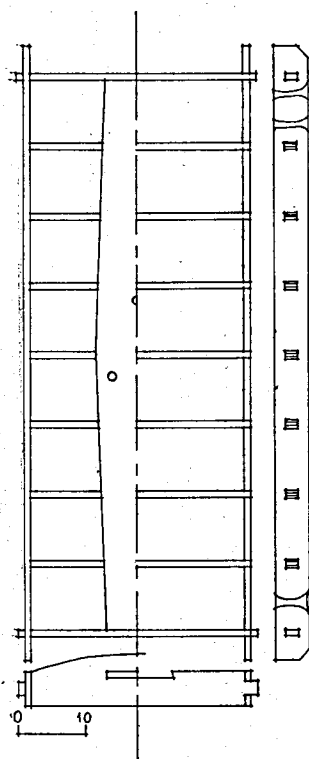
(2) 同書二〇三頁。

四、オーアシ(大足)

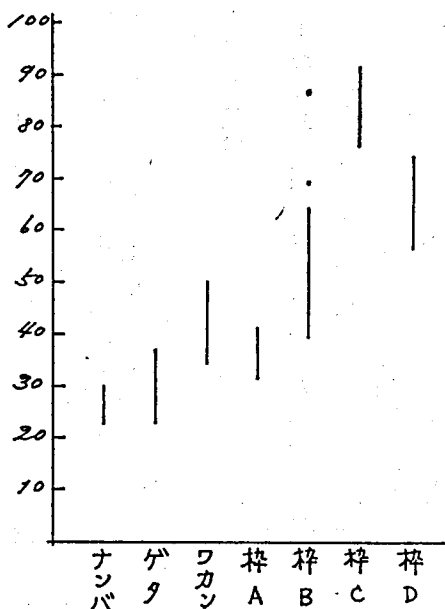
千葉県匝瑳郡光町小川台にて、昭和三十六年七月七日、潮田鉄雄氏採集。後同氏寄贈。収集番号二三八八三。寸法は縦八六・〇センチ、横三五・七センチ、高さ四・〇センチ。重さ二・一五キロ。

梓型の田下駄には、機能的にみて、二種の田下駄が含まれている。稲刈り下駄としての梓型田下駄と、代掻き下駄としての梓型田下駄とがそれである。前者は一般にその形が小さいので小形と呼ばれ、後者は大形と呼ばれている。<sup>(1)</sup>

第7図 岩手県沢内村のオーアシ



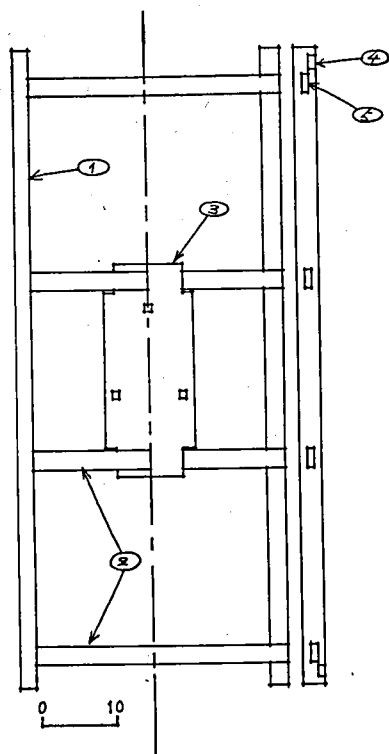
第6図 田下駄の型と大きさ



枠型大型（第6図の枠C型）の典型的な例としてしばしばひかれるもので、田下駄のなかで最も大きなもののひとつである。棧は板で、いずれも枠にホソ接ぎされている。枠の前後には手縄をかけた縄ずれのあとが溝になつている。手縄は四つ手に前後に張ることと、前だけにつけることとがある。

ナンバやゲタは板型、枠は枠型の田下駄を示す。縦軸は、縦の値でそれぞれの型がどのような長さ、大きさをとるか、その範囲を実線で表わしてみた。枠Aは棧が3本の型、Bは4、5本の型、Cはそれ以上の型、Dは前の棧の長い岐阜県や静岡県製の笠木型である。枠型Bと枠型Aとはこの図でみるとその間に断絶がある。これは用途とも関係している。

第8図 千葉県光町のオーアシ



1は柱、2は棧、3は足板、4は手縄を結びつける浅い小さな溝、5は棧のホソを示す。柱も棧も板ではなく建具の棧のような角材で、足板も小さく、軽いよう作られている。この下にシノダケを釘で打つて使うという。幅も前の沢内村のオーアシよりは広くなっている。同じ棧型といつても、形は特殊で、工夫のあとがうかがえる。

試みに、田下駄の縦の値をその形態に対応させてみると、第6図のように、ほぼ七〇センチの辺りから、この二つの形態が分かれていくことがわかる。

ところで代掻き下駄としての棧型田下駄の典型としてしばしば引かれるのは所蔵の岩手県和賀郡沢内村川舟採集のオーアシである。縦九一・〇センチ、横三二・五センチ、重さ二・八五キロ。その形は所蔵の資料中最も大きく、棧や棧は幅五五センチ、厚さ一〇ミリの板で作られ、前後とも力枚の棧は幅二〇ミリ、厚さ一〇ミリの通し柄を用いて接合されている。ほぼ同形の大型の棧型田下駄は潮田鉄雄氏の調査によって、千葉県からも一五例ほど報告されている。<sup>(2)</sup>なおこの型の田下駄は、すでに指摘されているように、山形市嶋遺址第八地点出土の田下駄の型にまでさかのぼらせることができる。<sup>(3)</sup>

こゝにあげる千葉県光町小川台の故鈴木紫郎氏所用のオーアシは、棧棧の接合の手法や寸法からみて、以上の棧型

大形の田下駄のうちに数えることができるように思われる。しかし、その形は前記の岩手県沢内村のオーアシとは何と異なることであらう。

第一にこの田下駄では杵も棧も幅の広い板ではなく、あたかも建具を思わせるような細い角材が用いられている。第二に杵木に渡された棧の数は、前後ともわずかに四本で、七本あるいは本の大足とは比較にならぬほど単純化されている。第三に、足板は縦二ナ・〇センチ、横一一・五センチ、厚さ一五ミリで、中の棧の間に通し柄で取り付けられている。もっともこのような足板とその接ぎ方とは前出の嶋遺址の田下駄や所蔵の資料では秋田県由利郡上川大内

第三表 杵型田下駄のプローション

内容 収集番号	呼 称	所 用 地	重 さ	幅	幅 に 対 す る 割 合						型 式
					長 さ	高 さ	杵の幅	杵の厚さ	棧の幅	棧の厚さ	
23883	オーアシ	千葉、匝瑳、光	2.15 <sup>kg</sup>	35.7 <sup>cm</sup>	2.41	0.11	0.09	0.07	0.09	0.07	大型(3)
3506	オーアシ	岩手、和賀、沢内	2.85	32.5	2.80	0.23	0.17	0.03	0.23	0.03	大型(9)
3460	タゲタ	秋田、由利、上川	3.00	39.5	2.23	0.15	0.15	0.05	0.15	0.04	大型(6)
23876	オーアシ	千葉、成田、野毛平	2.30	28.5	2.97	0.23	0.17	0.09	0.16	0.07	大型(6)
23836	オーアシ	千葉	2.60	33.5	2.27	0.13	0.13	0.05	0.18	0.05	大型(7)
4047	オーアシ	岐阜、吉城、国府	1.80	29.0	2.55	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	(中型(2))
3618	オーアシ	岐阜、大野、高山	2.50	29.0	2.45	0.14	0.10	0.10	0.10	0.03	(中型(2))
5182	オーアシ	新潟、中頸城、谷浜	2.25	36.5	1.90	0.16	0.08	0.08	0.08	0.06	小型(5)
21180	オーアシ	岩手、九戸、晴山	1.80	30.0	2.00	0.17	0.12	0.07	0.12	0.07	小型(4)

5039	オー	アシ	石川、鳳至、南志見	2.25	29.0	2.00	0.21	0.14	0.10	0.21	0.03	小型(5)
5809	オー	アシ	静岡、賀茂、下河津	1.30	28.0	2.01	0.13	0.11	0.09	0.04	0.02	小型(5)
15239	タナラ	ジゲタ	岐阜、	1.20	26.0	2.06	0.12	0.10	0.08	0.10	0.08	(中型(2))
5810	オー	アシ	静岡、引佐、三ヶ日	1.85	28.8	1.63	0.17	0.10	0.10	0.05	0.02	小型(4)
7251	オー	アシ	山口、大島、西方	2.50	28.3	1.45	0.16	0.16	0.11	0.07	0.07	小型(4)
23873	カン	ジキ	千葉、船橋、鈴身	0.60	22.5	1.58	0.22	0.40	0.03	0.27	0.02	小型(3)
23834	カン	ジキ	埼玉、上尾、川	0.80	25.0	1.38	0.15	0.12	0.05	0.14	0.04	小型(3)
5841	アシ	ナカ	福岡、八女、矢部	1.30	20.5	1.51	0.22	0.15	0.15	0.15	0.15	小型(3)

型式の欄のカッコの中の数字は棧の本数を表わす。履物なので履の値より、各クラスによつて長さの順に大きな違いのあることがわかる。枠は大きいものと細の広いものが使われる傾向があるように思われる。

村採集のタゲタにもその例を求めることができる。第四にそのプロポーシオンは、縦横の比率が横一に対し縦二・四で、この種の大型の田下駄の仲間では、「いささか横幅が広いように思われる。第五に、「緒孔が方形で右足用は前緒孔が左側に片寄り、履き易く出来ている」<sup>(4)</sup>。そして、第六に、棧の下には、「もと篠竹が丸竹のまま八本ほどとりつけられていたという。この標本の棧の裏側にはその当時の釘の跡が残されている。このように下駄の下に篠竹を打った田下駄の例としては、小川台にはど近い山武郡横芝町烏喰沼の古市嘉四郎氏所用のオーアシなどがすでに報告されており、この九十九里の平野地帯では、このように簀子をつけた梓型田下駄が行われていたことが想像される。なお、これらのオーアシの用途は苗代の下拵にあり、苗代を「押しかためるのに使う」という。この辺りでは昭和二六、七年の頃までは盛んに使用されていたとのことである。

では、このような、およそ典型的な代掻き下駄とはかけはなれた大足は如何なる理由で作られたのであろう

か。また梓の下に篠竹を取り付けたのはどのような利点からであろう。

先日、私は思ったって、小川台の辺りから鳥喰沼の附近まで行ってみた。鳥喰沼は今では耕地整理が行われ、広々とした水田地帯となつてはいるが、もとはヌマといい、所々胸までつかる沼田であつたという。その昔は田も開かれず蘭草の刈り場であつたという。田が開かれて後も、土地が低いので近くを流れる宮川の川さえ引くことができず、堆肥などは浮いてしまい、ほとんど無肥で耕作したという。植えた苗が人が後ずさりするとついてくるほど田の土は柔かつた。このような沼田での労働は、苗代でも「チチまでつかり」、わずかに「オーアシの紐（手縄）をたよりにして歩く」。底の方の泥が大足の上にあがろうものなら、重くて身動きなくなるといふ。そこで代の下泥が大足の上にのらないよう、田下駄に篠竹をつけるのだという。

一方、小川台の場合は、例え山間の田であっても、かなりよく開け、深さも聞けばせいぜい膝の辺りまでであろうという。こゝでも昔は田下駄が使われたが、それは前記の沢内型の代掻き下駄で、この標本のような代掻き下駄はやはり異例に属するとのことである。しかし、なかにはいくらか柔い所もあり、この標本はそうした苗代田の仕上げに使われたのであろうという。またひとつには持ち主の鈴木さんは竹細工をやっていたので、恐らく、沼田の代掻き下駄から思いついて、幅が広く、軽い代掻き下駄を工夫したのであろうとのことであつた。

## 註

(1) 潮田鉄雄氏「田下駄の変遷」『物質文化』一〇号所載

三四頁。

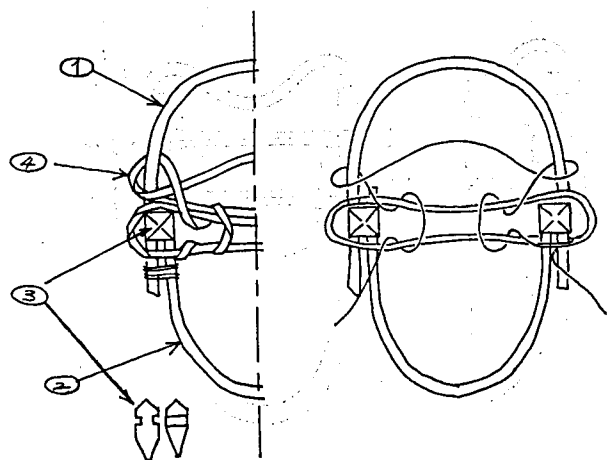
(2) 同氏『田下駄図集』（物質文化研究会刊）そのほか。

(3) 『山形市史』別巻一（昭和四三年同市刊）一一〇頁。木

下忠氏「おおあし」『民具論集』1所載一一〇三—一〇四頁、

(4) 潮田氏「続千葉県の田下駄」『民族学研究』三一巻一号所載）五四頁。

第9図 長野県開田村のワカンジキ



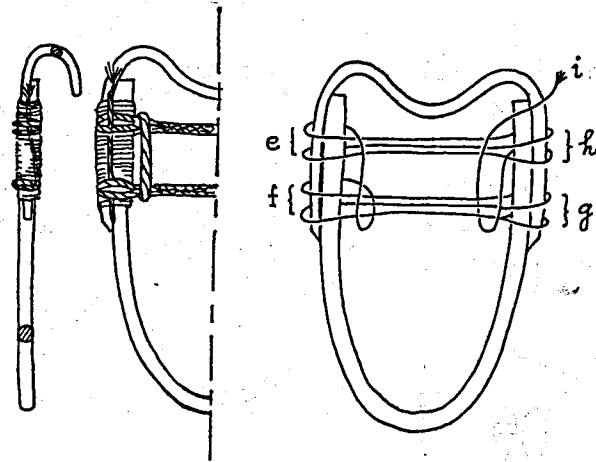
1は前輪、2は後輪、3は爪、4は足をとめる緒。複輪型のかんじきの典型的な例である。緒はブドーか何かの木の皮で、図のように1本で張られているのが面白い。二の字形をもとにして縄を張ること、その縄が一筋であることとはワラの縄を使つてのネットワークにもうけつがれている。

# 五、ハナカンジキ（鼻かんじき）

新潟県古志郡種芋原村にて、昭和一〇年六月二二日、AM同人採集。坂牧善長氏寄贈。収集番号五三〇八。寸法は縦三九・〇センチ、横二二・〇センチ。重さは四百グラム。

輪標<sup>わかんじき</sup>には、輪の構造に応じて、単輪型、複輪型の二つの型がある。その場合、単輪型は「一本の材を側面又は前端或は後端部にて結んだもの」で、また、複輪型は「二本の材を向き合せ、輪の中央側面にて結んだもの」である。<sup>(1)</sup>複輪型の輪標は地形その他の条件によって短冊形やクサビ形の爪があり、この爪を支点として両輪が接合されている。そのような複輪型の輪標の典型的な例として、私たちは所蔵の資料から木曽郡開田村のワカン<sup>ワカン</sup>を想起するのが常である。ただこの木曽のワカンの場合には、足を結ぶ緒や紐は一筋の木の皮で、それが同時に前後両輪の結合に役立てられているのであるが、しかしこのような二の字の形の縄の張り方は、藁縄の緒の輪標にも、原則的に受

第10図 新潟県の手ナカンジキ



複輪型といつても、このかんじきには爪はなく、主輪は平らで、それにハナギがとりつけられている。この前輪のハナギは爪先きをおおうように曲がつている。まんなかの二筋の縄はそれぞれ三本の縄を編み合せたもので、全体は右の図のように一本の縄で張つたものである。その張り方は、 $i-g-h-e-h-e-f-g-f-g$ の順である。

けつがれていたと考えられる。

新潟県古志郡の手ナカンジキは、前後の両輪からなり、その点以上の所謂複輪型に含めることができる。

しかし、一見してわかるように、鼻カンジキには前記の木曾のワカンとは、形態的に相異なる特徴が認められる。その第一は、両輪が「輪の中央側面に結」ばれていず、輪の構造は全体的にみて、むしろ後輪の先きに前輪を取り付けたということができる。前輪は後輪の約三分の一ほどの太さで、足の爪先きを包むように撓められている。これを鼻木はなぎといひ、材料には特にトズラコの木を撰ぶという。後輪は前輪とは対照的にほぼ水平である。その点この輪は爪を支点として曲折する複輪型の輪標よりは水平なスカリの要素を多く含んでいる。全体の形もまた他の輪標が楕円形なのとは違いU字形をなす。縦横の比率は横一・八で、スカリ以外では最も縦長である。また長さの絶対値もスカリに近

第四表 輪 標 の フ ロ ボ ー シ ョ ン

内容 収集番号	呼 称	所 用 地	長 さ cm	重 さ g	幅 cm	幅に対する比		輪の 型式	材料	網 の 型	爪の寸法 mm
						長 さ	太 さ				
23775	ス カ リ	新潟、中魚沼、十日町	70.5	380	35.5	1.99	0.04	複	竹	二、六、二	—
1898	ス カ リ	新潟、北魚沼、湯之谷	64.0	218	27.0	2.37	0.05	複	竹	二、六、二	—
5183	ス カ リ	新潟、中頸城、谷浜	61.0	430	52.0	1.17	0.04	単	竹	二、六、二	—
5308	ハナカソジキ	新潟、古志、種芋原	39.0	400	22.0	1.77	0.07	複	木	二、六、二	—
6730	カソジキ	新潟、北魚沼、湯之谷	38.0	526	30.5	1.25	0.06	単	竹	六、水、一	—
3661	ユ キ フ	広島、山県、中野	38.0	372	23.5	1.62	0.04	複	木	二、六、一	—
6733	ソルカソジキ	新潟、北魚沼、湯之谷	38.0	216	24.5	1.55	0.04	複	木	二、六、一	—
3212	カソジキ	新潟、中頸城、桑取	36.4	610	26.5	1.37	0.08	複	木	二、六、一	—
22096	カソジキ	秋田、大館、新町	36.4	490	20.0	1.82	0.06	複	木	二、六、一	35×14×75
23821	カソジキ	岐阜、大野、高山	36.2	587	23.5	1.54	0.06	複	木	二、六、一	30×25×100
23797	カソジキ	新潟、南魚沼、湯沢	35.0	400	25.0	1.40	0.05	単	竹	六、水、一	—
23732	カソジキ	新潟、北魚沼、川口	35.0	322	25.0	1.40	0.05	単	竹	二、六、一	—
22140	カソジキ	新潟	35.0	305	24.5	1.43	0.05	単	竹	二、六、一	—
2489	ユ キ フ ミ	福島、会津若松	34.0	470	22.0	1.55	0.08	複	木	井	45×12×80
2274	カソジキ	岐阜、吉城、上宝	33.5	622	22.0	1.52	0.07	複	木	—	27×30×125
2494	デ	群馬、利根、水上	33.0	580	22.5	1.47	0.07	複	木	二、六、一	35×15×120

5216	ワ	カ	ン	長野、北安曇、北城	33.0	555	20.0	1.65	0.10	複	木	28×17×95
1890	カ	ン	ジ	新穂、西穂城	32.0	290	28.0	1.74	0.05	単	竹	—
11087	カ	ン	ジ	新穂、古志、山道	31.5	310	22.2	1.42	0.05	単	竹	—
1900	カ	ン	ジ	新穂、長岡	30.0	263	28.0	1.07	0.05	単	竹	—

複は複輪型、単は単輪型を示す。二、六、ロ、十、水などは繩の張り方で、二の字形、六角形、ロの字形、十の字形、水の字形などを示す。上の数は所蔵の標本からその半数を抽出し、大きさの順にならべたもので、幅と長さとは  $\gamma = 1.74 - 5$  (ただし、幅20~50、長さ50~90) にそつて分布していることがわかる。マルカンでは単輪型で幅と長さとの比はほぼ1.4以下である。

い値を示す。

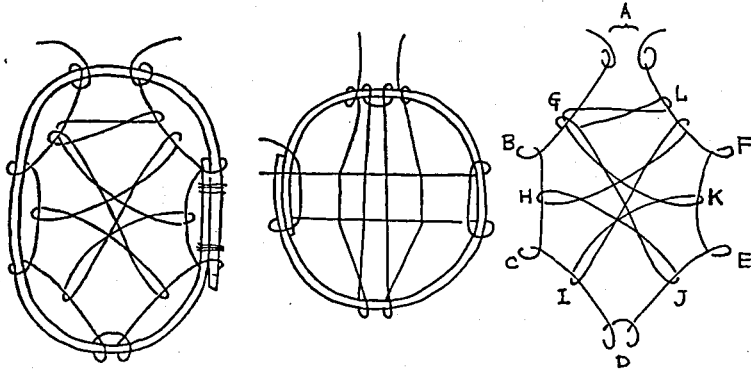
前輪と後輪との接合には太さ五ミリの細い藁縄が用いられていて、その上にさらに足を掛ける縄が張られている。この足を掛ける緒の編み方は一本の縄で、しかも、まんやかに二の字形の縄張りができるよう配線されている。二の字の部分には三ツ組が使われている。

付票によれば、鼻カンジキは斜面を登るとき、鼻先きに雪がつかず、屋根の雪おろしや坂道を登るとき、好んで用いられたという。

勝谷稔氏によれば、山間の地帯では、楕円形のスカリは足さばきがよく、効率的に歩行できるが、その反面、先きに雪がつくので好まれず、そのかわり雪のつかない円形のスカリが用いられているという。<sup>(2)</sup> その点、先を反らせた鼻カンジキは、楕円形の輪樑の効率的な歩行性と、斜面を登るときにも雪がつかないという円型の輪樑の利点とを共に備えていたことができる。<sup>(3)</sup> この種の鼻の反り上った輪樑は『北越雪譜』にも記録され、また、岩手県下閉伊郡からもその実例が報告されている。

なお、鼻カンジキは明治の末頃より漸次廃れ、マルカンジキに置替えられていったという。所蔵の標本によれば、

第11図 新潟県のマルカンジキ



単輪型で、しかも輪は山の丸竹である。ネットの張り方には二つの型がある。左端のは右端のように、はじめ六角形に縄を張つておき（A—B—C—D—E—F—A）、それに内側の星形の縄をかけたもの（G—J—H—L—I—K—G—L—G）で、他の型は図の中央のように横縄の目に縦の縄を通してゆく。

このマルカンジキは山竹を丸竹のまま曲げてこしらえる単輪型の輪樑で、縄の張り方にはおよそ二つの型が確認されているが、いずれにせよ軽く作りやすく、そのため鼻カンジキに取ってかわったのだと思われる。

註

(1) 高橋文太郎氏『輪樑』（昭和一七年日本常民文化研究所刊）二頁。

(2) 勝谷稔氏『雪の道』（昭和三十年積雪科学館刊）一一頁。

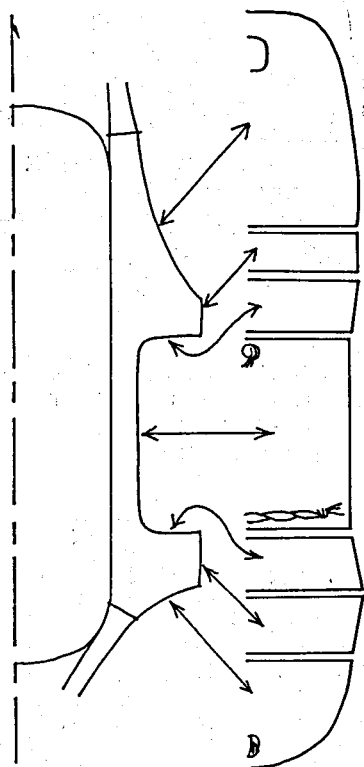
(3) 「たて一尺二三寸よこ七寸五六分、形図の如くシャガラという木の枝にて作る。鼻は反してクマイフという藁又はカソラというつるをも用ふ云云」『北越雪譜』・高橋氏前掲書図版七。

#### 六、カジキゲタ（加治木下駄）

鹿児島県薩摩郡樋脇村市比野にて、昭和一〇年一月一五日、早川孝太郎氏採集。同氏寄贈。収集番号五八四九。寸法は長さ二一・一センチ、幅八・〇センチ、高さ五・五センチ。重さ二八七グラム。

加治木下駄は鹿児島県姶良郡栗野町の竹迫・上村の両部落で

第12図 加治木下駄の面構成



加治木下駄はおよそ12の面で構成されている。おのおのの面の形は私たちの下駄屋の下駄ほど単純化されていないし、仕上げにも荒さが残されてはいるが、このように整理され、定型化されていることがわかる。タケが低く、歯の形が梯形で、しかも前後とも、歯の外側が斜めに削られているのがおもしろい。この上に竹の皮を編んだ表てをつけてはく。

藩政時代以来作られてきたという。この下駄は履きやすく、竹の皮の表が付いているので冬暖かく、足に馴染みやすく、そして、鼻緒が切れたり歯が折れたりする心配がないといい、この地方では広く「普段履き」として愛用されたという。<sup>(1)</sup> そのように重宝な、実用的な加治木下駄にはいったいどのような特徴が備わっていたのであろうか。

この標本では台は長さ二〇・五センチ、厚さ二五ミリ、所謂櫛形に削られている。<sup>(2)</sup> 材料は杉であるという。歯は連歯で、断面は所謂銀杏歯の型である。台の上面の幅と歯先きの幅の間には二〇ミリの開きがある。加治木下駄の安定性は第一にこのような低い台と歯の形とに基づいていたように思われる。なおこの台の形は出土品の下駄に似て、古い形をとどめていたとも考えられる。

また歯の前後は斜めに削り落されている。下駄の歯の形には、薩摩下駄のように両縁りといって歯の前後を縦にま

つすぐに削りとする型と、「神戸」や「小町」のように前側を斜めに削り落す型とがあり、後者をノメリという由である。加治木の場合、前後の歯が斜めに削り落されているのだから、これはいわば両ノメリの型であろう。このように前後とも歯の形がノメリになっている下駄は、すくなくも所蔵の資料についてみれば、加治木の系統に属する標本に限られるように思われる。

歯と歯との間隔は七五ミリ、深さは二〇ミリで、全体の長さに対する歯と歯との間隔は、他の類似の標本と比較してみると、極めて大きいことがわかる。この歯と歯との間の溝を広くするという点は、下駄全体の重さの軽減に関係しているように思われる。

台の上には厚さ一〇ミリの竹の筍の皮で編んだ表が張り付けられている。この表を編むのには、まず竹の皮を幅一〇ミリほどに裂き、それをさらに二つに折って編むという。この作業は非常に根のいる仕事であるという。台にはその先端から一五ミリの所に四ツ、後から一〇ミリの位置に一ツ、歯の間の溝の前側と後側とに一つずつ、都合四ヶ所に小さな穴が穿たれており、この小穴に太さ三ミリの棕櫚の紐を通し、表を張りつける。ところが鼻緒もやはり竹の皮のスゲ緒で、横緒もまた鼻緒と同じように表の草履の裏で結んでとめる。すなわち、加治木下駄の場合、緒は台の下で結ぶのではなく、予め草履を編んでおき、それを棕櫚の細い紐で台に縫いつける。加治木下駄ではこのように台と表とが作りの上で独立しているのである。加治木下駄は草履を台にのせたものである。なお台の裏側の鼻緒の位置には前壺に似せて浅い彫り込みがなされている。履きやすく「履けば履くほど締ってくる」、または緒が切れることがないというこの下駄の特性はこのような表と台との構造に基ずくものではないかと考えられる。

所蔵の資料には加治木の系統に属する標本八点のほか、や、広く類例を求めれば、ノメリ歯型の下駄が約一五例ほど見出される。その内訳はほゞ次のようである。今、その重さと寸法とを比べ合せてみると、加治木はそのうち最も

第5表 加治木下駄のフロボーション

内容 収集番号	呼 称	所 用 地	重 さ	幅	幅 に 対 す る 比					
					長 さ	高 さ	台の高さ	溝の幅	溝の深さ	
5849	カジキゲダ	鹿兒島、薩摩、樋脇	287	80	2.62	0.69	0.44	0.94	0.25	
4250	カツチキゲダ	鹿兒島、西桜島	322	85	2.53	0.76	0.53	0.94	0.35	
5327	カジキゲダ	鹿兒島、	324	90	2.39	0.78	0.44	0.83	0.39	
20696	ビツタイゲダ	鹿兒島、鹿兒島、	344	85	2.53	0.80	0.53	0.91	0.39	
20697	ビツタイゲダ	鹿兒島、鹿兒島、	292	80	2.69	0.81	0.50	0.94	0.31	
20751	ビツタイゲダ	鹿兒島、鹿兒島、	290	85	2.47	0.80	0.47	0.88	0.30	
23723	フツタイ	鹿兒島	388	90	2.39	0.78	0.50	0.78	0.28	
3738	ウツツケ	福岡、糸島、芥屋	379	80	2.63	0.75	0.50	0.75	0.31	
3739	ウツツケ	福岡、糸島、芥屋	302	80	2.06	0.75	0.44	0.54	0.25	
4377	ビツタイ	佐賀、小城、南山	356	75	2.87	0.73	0.53	1.40	0.27	
4125	オモテツキ	鹿兒島、大島、硫黄島	347	85	1.94	0.88	0.59	0.35	0.41	
6724	ボンボンゲダ	新潟、北魚沼、湯之谷	630	85	2.64	1.00	0.72	0.35	0.47	
15375	松田屋下駄	静岡、焼津、	510	100	2.15	0.60	0.40	0.75	0.30	
8003	コソ下駄	三重、志摩、和具	635	90	2.44	0.89	0.52	0.37	0.33	
6425	クリノギゲダ	岩手、江刺、福岡	762	110	2.09	0.73	0.73	0.82	0.55	
15196	ライマソングダ	青森、八戸、	696	100	2.30	0.70	0.70	0.65	0.55	

15195	ライマンゲタ	吉森、八戸、	658	99	2.32	0.71	0.71	0.61	0.56
15196	ライマンゲタ	青森、八戸、	696	100	2.30	0.70	0.70	0.65	0.55
23742	マンサクゲタ	延手、盛岡、	773	105	2.22	0.76	0.76	0.76	0.67
15192	ドンゴロゲタ	長野、	772	97	2.37	0.72	0.55	0.31	0.38

軽く、しかも、台の高さが低く、前記のように溝の幅の割合が極めて高いことが改めて確認される。

ウツツケ 福岡県糸島郡芥屋村採集。製作地は同郡泊村とある。前歯はノメリ、後歯は繰りで、台のセイも低く、加治木と同じように表付きである。ただし、鼻緒のみは前壺に通し台の裏側で結ぶ。表ては、前・後・横緒の付け根の都合四ヶ所を釘と棕櫚の紐でとめる。

鹿児島県十島村硫黄島のオモテツキ 前歯はノメリで、セイは高く、ヨソ行きである。しかし、台には壺がなく、緒は表の下で結ぶ。表は台に鉄でとめる。

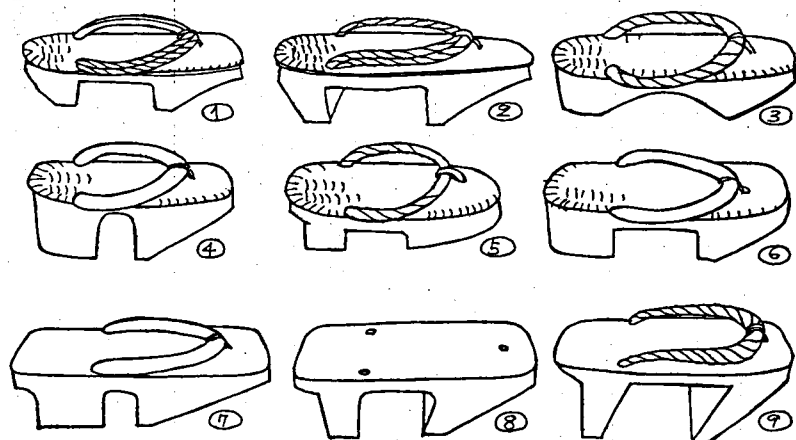
ビッター 佐賀県小城郡南山村採集。台のセイは低く、表は幅五ミリの簾で台に縫いつける。歯と歯との間の溝は谷形。

松田屋下駄 台の材料は椎。産地は静岡県藤枝という。前歯はノメリ、台に壺はなく、表ては前後・中央・横緒の元の五ヶ所に鉄を打ち、それとめてある。寸法は加治木と同じで、重さはその倍近い。

ドンゴロゲタ 長野県採集。所謂ジカバキで、前歯はノメリ、後歯は繰りである。歯と歯の間の溝は極めて狭い。青森県八戸地方のライマンゲタ 前歯はノメリ後歯は後繰りで、前歯の後は雪がつかないよう浅く傾斜している。

岩手のクリノキゲタ 旧御明神村の特産で、これもまた雪がつかぬよう歯は傾いている。「秋雪が降り初める頃買求めて、冬履きなれど丈夫なために春夏秋冬の年中家内の普段履きとして日常使用されている」という。重さは以上の<sup>(3)</sup>

第13図 加治木下駄の仲間たち



史料館研究紀要 第三号

1は加治木下駄、2は鹿児島地方のビッタイ、3は佐賀県南山村のビッタイ、4は硫黄島のオモテツキ、5は福岡県のウツツケ、6は静岡県松田屋下駄、7は長野地方のドンゴロ下駄、8は青森県八戸地方のライマン下駄、9は岩手県盛岡地方のクリノキ下駄。下の段三例は冬のいわゆる雪下駄。

下駄の類のうち最も重く、寸法も大きい。後歯は後繰り、前歯はノメリの形をとる。

註

(1) 南日本新聞社編『用と美——南日本の民芸』

(昭和四一年未来社刊) 三九頁以下。

(2) 今西卯蔵氏『はきもの変遷史』(昭和二五年同書刊行会刊) 二七五頁による。

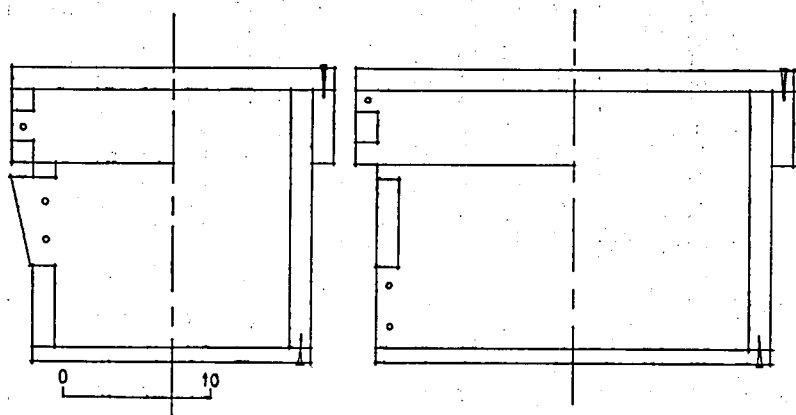
(3) アチックミュージアム編『民具問答集』(前出) 四五頁。

## 七、 箱

寸法は正面三〇・〇センチ、側面奥行二二・〇センチ、高さ二〇・五センチ、重さは中味とも三・四キロ、箱のみの重さ二・一キロ。呼称、所用地などは明らかでない。

『日本捕魚図志』には、沖箱または沖合箱は多く釣の道具や漁の道具を収めておく箱で、古くは鉄釘を用いたが、腐蝕の憂あるところから、後に糊付け

第14図 沖 箱



漁師が沖に出るとき釣の道具などをいれてゆく箱で、厚い板で作られていて、重い蓋がはまっている。身も蓋も隅は三枚組みつぎの手法で接合され、木の釘でとめてある。底板は蓋の板よりややうすい。所用地はわからない。

にて製し、海水に浸すも潮の入ることなく最も堅牢であるという<sup>(1)</sup>。そのような潮の入らない堅牢な箱はどのような構造なのであろう。

寸法をとってみると、この標本においては、身は高さ一八・八センチ、その正面は二六・八センチ、奥行きは一九・〇センチ。従ってこの標本の本体は正方形の側面と、縦横の比率が一对一・四の矩形の正面を有することがわかる。胴の側板は厚さ一四ミリ、底板の厚さは一〇ミリで、厚い板を用いて作られている。

問題はその板同志、側板と側板との組み方で、側板と正面の板とは非常に特徴的な一種の三枚組みつぎの手法を用いて接合されている。およそ組みつぎの手法には相欠けつぎや五枚組みつぎなどの型がある。三枚組みつぎはその最も一般的な型ではあるが、この沖箱のそれは、側面の板の上端から約六〇ミリの所に上幅三〇ミリ、下幅一三ミリの梯形の袖を刻み、その袖が組み手としての役目を果たす。この袖は、一見、蓋受けのようにも受取れるが、蓋の高さは六五ミリ、蓋の上板(甲板)の厚さは一五ミリあるので、

蓋の内側のセイと身の側板の袖から上の部分との間には約一〇ミリの開きがあり、袖はあながち蓋受けにはならないことがわかる。

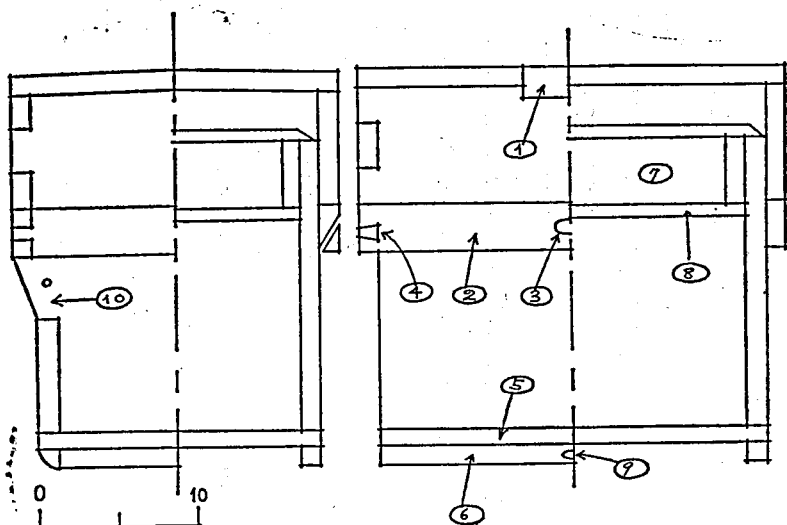
側板と底板との接合は平打ちで、太さ五ミリの木の釘が用いられている。底板には、この木の釘の位置とはすこしずつずれ、別に直径三ミリほどの小さな釘の跡が一部にかすかながら残されている。この小さな釘の間隔は約五〇ミリで、もと底板の四隅にそって細い棧が打ちつけられていたことを示す。

蓋は被せ蓋の型式をとり、正面は三〇・〇センチ、奥行きは二二・〇センチ、高さは六・五センチ、板は厚さ約一四ミリある。甲板の表面には木理がくっきりと浮び上り、この箱がながい歳月、使用に耐えてきたことを物語る。蓋の縁もまた激しく凹凸している。蓋の側板同志は三枚組みつぎで組まれ、また、正面には縁の所に幅一二ミリ、長さ八〇ミリ、厚さ五ミリの短冊形の竹の板が一枚打ちつけられている。この板は、反対側の同じ位置にも、かすかながら同じほどの大きさの板をとめたと思われる釘の跡が残されているので、蓋をとめる緒の縄ずれを防ぐために取り付けられていたのであろう。紐も現在はすでに失われているが、曾ては、底の下に棧があり、この棧の穴を通して緒がかけられていたと考えられる。

箱の表には一面に墨か渋が塗られていたらしく、剝落の様相を呈している。また、箱の蓋を返してみると、そこには細い刃物の引き疵や突き疵が生々しく残されている。この疵は餌袋にいれる小魚を刻んだ跡ではないかという。

所蔵の資料中、この沖箱に類する標本としては、高知県室戸町の吉岡高吉氏所用の沖箱、鹿児島県大島郡十島村平島日高氏所用のイソバコ、沖縄から採集されたクレーバー、高知県清水町の山城屋儀右衛門船住徳丸の仕切箱、それに、静岡県採集のツゲの五例をあげることができる。このうち静岡のツゲは側板には袖がなく、蓋は側板に打ちつけられた框によって受けるようになっているので、一応除外するとすれば、残り四例には、側板の袖といふ全体の寸法

第15図 高知県室戸の沖箱



1は縄ずれをふせぐ鉄の板、2は蓋をうける木の枠、3は緒を通す枠の小さな穴、4は組み手のアリ型のホゾ、5は底板、6は底板の下に打たれた棧、7は落としの仕切箱、8は箱の底板、9は棧にあげられている緒を通す小穴、10は袖。第14図の所用地不明の沖箱も、もとはこのような形をしていたと考えられる。

といい、板の接ぎ方といい、蓋、底の作りにいたるまで、ほんゝ共通の手法を見出すことができる。

ところで、この四例について、特に興味深いのは側板の袖の機能であろう。袖は以上四例では組み手にとどまらず、蓋の框となる棧を支えている。この棧は吉岡氏の沖箱では幅三〇ミリ、厚さ一五ミリで三枚組みつぎの蟻柄、平島の磯箱やクレーパーでは平打ちで接合されているが、いずれも釘などつかわず身のまわりにびったり嵌め、袖の上へのせられているのである。しかし、この棧のおかげで、身と蓋とは完全に噛合い、また、身と蓋との間に生ずる内部の透間を利用して、中子を落しでいれることもできるようになる。

そこで、この所用地不明の標本にも仮に袖の上に棧が嵌まっていたとすれば——棧を確認することは今のところ証拠はない——箱の総高は

第6表 沖箱の寸法

内訳 収集番号	呼 称	所 用 地	縦 cm	縦に対する比		重 さ kg	側 板		底板厚さ	蓋		甲板 厚さ
				横	高さ		厚さ	幅		厚さ	幅	
?	?	?	22.0	1.36	0.93	2.10	15	180	12	15	53	15
5947	(沖 箱)	高知、安芸、室戸	20.7	1.30	1.23	2.30	13	185	13	13	70	10
4168	イソバコ	鹿児島、大島、十島	17.0	1.47	0.94	1.00	13	130	9	7	40	8
21975	クレーンバー	沖縄	20.0	1.25	0.93	1.55	12	155	8	10	28	7
6223*	シキリバコ	高知、幡多、清水	17.8	1.47	1.07	1.05	10	170	10	—	—	—
5802	ツ ズ	静岡	22.0	1.34	0.98	1.60	10	170	6	9	40	8

※ 蓋はない。

現在よりさらに高くなることが想像される。その形は、プロポーシヨンからみて、平島の磯箱や沖縄の沖箱よりは、むしろ、土佐室戸の沖箱の形により近づくことが想定される。このことはこの標本の旧所用地を推測せしめる手掛りを与えているように思われる。

この標本には挽物の鉤針いれも含め、左記の約五〇余点の鉤針類が収められている。これらの漁具が本来この箱に収められていたとすれば、その示すところもまた箱の所用地の推測の助けとなることであろう。宮本常一先生の御教示によれば、これら鉤針類の組合せから推測される地域は、さしあたり千葉・高知の両県で、さらに餌袋の型式から高知県をあげることができるという。

一、イカ鉤針（九本） 長さ七ないし一二センチ、針は六本のもので一二本のものがある。

一、擬餌針 メジ（まぐろ）、ソウダガツオの漁に用いたという。長さは五〇ないし九〇ミリ。

一、サメ・ブリ漁の針（一〇本）長さ七〇ミリ、太さ七ミリ。先端二〇ミリが返しとなっている。なかに対馬のミツヤマバリが混入しているという。

一、延縄用の針一式 長さ二五ミリ、直径六〇ミリ、高さ三五ミリの挽物の器とも。

一、ヒラメ針（四点）長さ一三・〇センチ、太さ三ミリ、返しは一〇ミリ、元に錘がある。

一、餌袋（一点）重さ五百グラム。サバ漁に用いられるという。

一、針曲げ（一点）長さ一五センチ。柄の直径二〇ミリ。先に曲げ鉄が据えてある。

#### 註

（一）旧祭魚洞文庫蔵『日本捕魚図志』上巻。

（二）同形の沖箱は千葉県夷隅郡岩和田村でも用いられていた

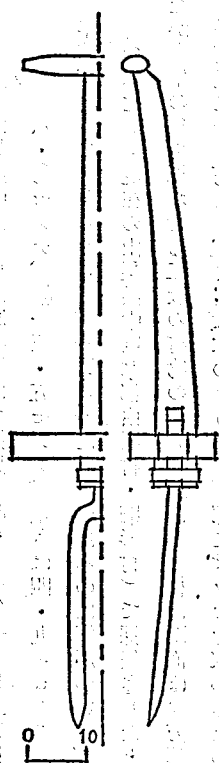
という（同書）。縦横の比率は一对一・三、高さとの比率は一对一・一で、側板にはやはり袖があり、棧には緒を通す小さな穴が穿たれている。棧は平打ちである。

#### 八、ヤンギョオ（野牛）

山梨県中巨摩郡旧原七郷にて採集。昭和一三年一月二五日収蔵。収集番号八三九二。寸法は高さ一〇八・〇センチ、幅一三・五センチ。重さは四・九キログラム。

数年前、所蔵の資料のうちに、一風変わった農具があるのに気がついた。この農具（鋤）は付票によれば「野牛」とい、昔の原七郷（現在の山梨県中巨摩郡白根村・櫛形村）で採集されたという。その形態は太い頑丈な柄の先きに、あたかも牛の角を思わせる二股の打物の鋭い刃があり、柄は断面はV字形で、元で七〇ミリ、上で五五ミリに四〇ミリ、手前側に軽く彎曲し、また撞木のように、頭部にはツカを収めるための山形の切込みと幅五〇ミリ、厚さ一五ミ

第16図 山梨県原七郷の野牛



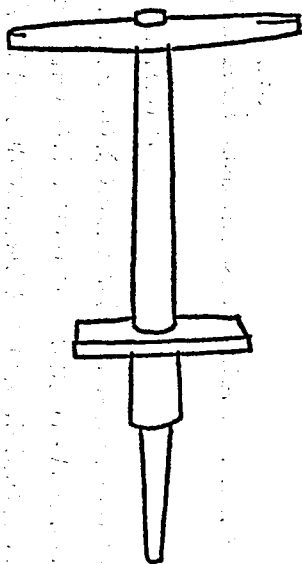
太い柄の先きに打物の刃をすえ、それに踏み板をとりつけたもので、畑の土をやわめるのに使われている。シャベルのように足をかけ、刃を土にいれ、そして腰をかがめて土をほりかえす。そのあとを人の力でひくスキでウネをたてる。刃はもと一本だつたという。

りの柄が切られている。つかは長さ二五センチ、短径三〇ミリ・長径四五ミリ、両端は握りやすいよう次第に細く削られている。つかを置いたための柄は柄の前側にあり、ツカは掘込みやすいようにその位置が加減してあるように思われる。また柄のやゝ下の部分には幅一三・五センチ、長さ三〇センチ、厚さ三五ミリの丈夫な踏板が嵌めてあり、板の両端はちょうど足の前半分がかかるよう幅狭く削られている。刃を据えるには、柄の片側に幅三〇ミリ、長さ一一センチの四角な穴をほり、そこに刃を収め、その穴を埋め木でふさぎ、その上から幅二〇ミリの鉄のかずらをはめ、さらに踏板を嵌め、二重に押える。刃は幅二五ミリ、先端は舟の舳先のように尖っている。

しかも、重さは四・五キロでこの重さは三本刃の鍬などの一・五倍以上にあたる。そこで、かねてからこの農具がどのような用途に、どのようにして使われるかが知りたいと思った。

昨年七月、山梨県中巨摩郡白根町上八田においてその実際を確認する機会に恵まれた。上八田は釜無川の支流御勅使川の形作った扇状地にあり、現在は一面の桃畑となっているが、戦前までは主として桑畑で、それ以前は煙草と木棉の生産地帯で「水利乏シキ処ニテ居民売買ヲ兼ヌ」といい、耕地は不毛で、鍬はほとんど使えず、野牛や人の力でひ

第17図 東京青梅市のヤギリ  
(野切り)



柄はカシで、踏み板のことをヒライタといい、スギでこしらえた。柄の先きには鉄の刃がすえてある。この農具もまた山間の小石まじりのかたい畑をやわめるのに使われていた。後に、二本刃の鍬の形からヒントをえて、今ではここでも二本刃のヤギリが使われている。

もともと野切りはツカが四五センチで極めて長く、逆にヒライタと呼ばれる踏み板は長さ二四センチでやや短かく、柄は太さ五ミリの断面円形のカシの用材である。重さと高さはほとんどの牛のそれに等しい。この農具もまた、俗にヤマドリマツチとい

く、スキを使つての「体当りの農耕作業が、原七郷の生活の総てであつた」という。土性は粘質土で見た目にも固く、小礫が所により多量に含まれていて、日照りには土は固く締つてしまうという。そして野牛はこのような土壌での深く根の張るような作物（煙草、桑、薩摩、手旁、人参、大根など蔬菜、そういえば商品作物と蔬菜類）の栽培にのみ用いられてきたという。

その使い方は、踏板に足を掛け、ほとんど板の所まで深く刃を土のなかに突きさし、足はずし、そして腰を折り、踏板を支点にして土を掘り起す。こうして掘りおこされた土塊はシュモク（撞木）という木の槌で細かく割り、さらにクレフチ（塊打ち）で細かく砕き、そしてその後、人のひくスキでウネをたてるのである。

ところが、その折伺つた所によれば、野牛の刃はもと一本で、明治の中頃、二本に改良されたのだという。その形は、例えば、都下青梅市の成木そのほかの地区で使われているヤギリ（野切り）の古い形にほぼ一致するように考えられる。

う水を吸いやすく、そして乾きやすい（乾けば山鳥の糞のようになるので山鳥糞土という）小石交りの畑を「ユルメル」（掘り返す）のに用いるという。なお、こゝでも同じように畝は小石交りの畑で使わずらく（マツチの畑でも二反で一年に三本刃の畝の刃先が約八センチは磨滅するという）、昔は一般に野切りでユルメタ後をエンガという踏畝でウネをたてたという。

註

（1）『甲斐国誌』巻之百二十三附録第五（『甲斐史料集成』六の

（2）野呂川上水道組合『明けゆく扇状地』（昭和三五年同組合刊）一二頁。藤村潤一郎氏の御教示による。

六〇八頁。

あとがき

小文の構成にあたり、田下駄については潮田鉄雄氏、栗原茂氏、鈴木登氏、沖箱については日本常民文化研究所の宮本常一、河岡武春両先生、野牛・野切りについては甲斐史学会の手塚豪、手塚寿男両先生、多摩郷土研究の会の浅井徳忠、滝沢博両先生から懇切なる御教示をいただいた。心からお礼を申し上げたいと思う。小文では文部省史料館所蔵民族資料図版目録第三巻所載の標本七点とその他一点をとりあげた。